



風 狂

第 5 7 号

風 狂 の 会

風狂（第57号）目次

詩

また明日	さとうのりお
お転婆な老嬢たち（）	なべくらますみ
一步の木	長尾雅樹
美しい春のために	高村昌憲
厠	原詩夏至
転落	出雲筑三
『平成』最後の桜	高 裕香
どのあたり	富永たか子
コルカタの丘の上	神宮清志

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（四十一）	三浦逸雄
--------------	------

エッセイ

老人の冷水（続き5）	北岡善寿
重美重文の能面をめぐって	神宮清志
昭和は遠くなりにはけり？（1）	高島りみこ

翻訳

アラン『大戦の思い出』（二十三）	高村昌憲訳
------------------	-------

執筆者のプロフィール

大変だあ！ クラスターの糞野郎が墜ちやがった
アブデル お前の息子もやられたぞ！
父さん 痛いよう
体の左がとても痛いんだ
ミルバは大丈夫かしら
一緒に遊んでいたからなんだ
僕はミルバが好きさ
可愛いし 勉強もできるしね
あの子も僕のこと好きだって言ってたよ
明日 向こうの一本オリーブの丘まで遊びに行くって約束したんだ
あれ 雨が降ってきたみたい
僕の顔に雨が当たってるもん
父さん なんだか少し痛くなってきたよ
でも とても眠くなってきた
父さん 僕をテントまで抱いて行ってよ
夕御飯はいいや
どうせまたあの堅いパンでしょ
今日は早く寝て
明日ミルバとあの丘まで行くんだ
父さん とても眠いんだ
明日の朝起こしてね
父さんまた あし・・・た

おしゃべり

電車の優先席を占めた四人の女性たち

高尾山へでも行ったのだろうか

軽登山的スタイルの

楽しそうにしゃべっている

筈なのに声がない

大きい口を開けて身振りも添えて

笑って でも声がない

ああ、そうだったのね

声のない会話に私は引き込まれる

何をしゃべり合っているのか

全く解らない

でも 楽しそう

これはきっと聞こえたらうるさいぞ！

何て思いながら参加している

気分になる

私の視線に気付いた彼女たち

でも無言のおしゃべりは止まない

むしろ意識してしゃべり続ける

肩を叩いて笑い合いながら

大げさな身振りに引き込まれ

思わず笑ってしまう

でも話の内容は分からない

聞こえてこない

電車を降りるとき

喋り続ける彼女たちに

手を振ってしまった

会話に参加している気分だったので

彼女たちも大声で

手を振ってくれた

無言だったけど

大声で

あの一本の木に向って
私は心の中で叫び続けていた
孤高の夢をいつまでも抱きながら
天空に聳え立つ一本の裸の木に向って
葉を落とした木が荒涼の丘に立っている
そんな風景を眺めて
私は解けない謎を探るように
凝然として立ち竦むのである
回りは漂泊とした荒地の原野である
芝生の丈の雑草が生えそぼっている
私は一体何を叫んだのであろうか
一本の木は寒々と空に伸びている
あの木の在る所に
純な一途の心が在るとでも謂うように
木に語るものがあるとしたら
それは多分孤立したものの思いであろう
荒地に突き立った
決然とした潔ぎ良さでもあるから
真一文字にその存在を認めさせて
大地を立ち割りながら
立ち尽している木の姿から
運命の向こうの声を探している
空に向って心の叫びを伝えよう
一本の木の枝を折り曲げて
天まで届けと弓引きながら
打ち上げた夢の言葉は飛んでゆく
一本の木のままで
このままで天まで伸びて欲しいものを
垂直に心を天に突き放しながら
私は己の心の迷いを呪っている
今生の無明の心を晒す恥を思えば
一本の木に縋って悔んでいる
あの木の先の向こうに
広大な青空が風に鳴っている

真実が常に正しいものとは限りません
嘘も方便が正しい場合もあるからです
ところが美しいものに嘘はありません
世辞も阿諛も全然美しくないからです
美しいものと経験は関係がありません
逆に美は若々しく常に新しいものです
老人や病人が醜いのは仕方ありません
老いや病気が数々の皺を残すからです
一瞬でもそれらの皺を忘却させたなら
老人や病人にも美への回帰は可能です
忘却するためにも意志が必要です
外部の環境に任せてはならないのです
美はもう一つの秩序の力を創りますし
人間は外部に従って創られていません
内部の力は一瞬に皺を忘却させますし
美は何時も純真な力強さを失いません
美を生む意志を生来の性格と見做すと
老獪な商売の綾の様に美を損ないます
内部の力が一瞬でも皺を忘却させると
美しく正しい春が瞬時に戻って来ます

妻と私はそこで厠を借りた
――散歩の途次
いつもの道を逸れて迷い込んだ
無人の大伽藍で。
椿が綺麗だった。
石段は細く急勾配で
門前から何度も折れ曲がりながら
ひたすら上へ上へと延びていた。
その全ての踊り場には
苔むした数体の地藏が
真新しい赤い涎掛けを並べ
消えかけの目で虚空を見つめていた。
彼らは衆生を
――或いは少なくとも妻と私を
殊更に斥けてはいなかったが
さりとして殊更受け入れてもいなかった。
石段を登り詰めた先には
本尊も堂塔もなく
ただありふれた檀家たちの墓群が
雨催の春風に吹かれていた。
なす術もなくまた石段を下り始めた妻と私は
途中
砂利を敷き詰めた駐車場の片隅に
小さな厠を見つけた。
寒々しいタイルの障壁を隔てて
妻と私は同時に用を足した
――あたかも
それだけが
散歩の途次
この椿の美しい無人の時空で得られた
唯一の悟達であるように。

籠に似たものが正しく転落している
懐かしい人が座っている
しかし転落しているとは感じてない
助けるべきか 傍観すべきか
なぜ気付かないのか
籠の人は漫にほほえんでいる
あれは安堵の顔だったのか
何かにとりつかれている目元
こちらに気付く素振りもない
あいつだけは助けたい
余計なおせっかいだが
愛していたんだ
転落は仲間をつどい続けている
こっちに來い 助けてやる
籠は落下速度を増してきた
光より速い重力波は存在する
人間社会はつまりは消耗戦
下界にぐずぐず登っているだけだ

もう4月の半ばというのに
桜は、『平成』最後の桜と思ってか
ゆっくり ゆっくり 散っている。
いく度の雨に打たれても
春の嵐に吹かれても
流れ行く時を惜しんでいるようだ。
四月の空は、青みを深め
桜の背景になろうとする
ぽっかりと浮かんだ雲もよし
風よ！ ゆっくり ゆっくり
時よ！ ゆっくり ゆっくり
やって来る『令和』に繋いでおくれ！

逢魔刻

いくつもの

悔恨と悲哀を記して

はなびら

風の中

撫で生す

木肌の癩癩

長い道のりに

栄光のときはあったか

いま寿命のどのあたり

問うてみたい

ことしの桜よ

コルカタの丘の上には白い雲
それはまさに希望をもたらす雲
あれが大きく広がり厚みを増して
黒い雲に広がればいよいよ待ち焦がれた雨
雨が降って気温がドスンと下がると
コルカタの人は息をつき
神の恵みを歡び祈る
太陽の灼熱に痛めつけられる日が去って行く
コルカタの丘の上に出た白い雲
今日はまだ高く広がっているだけ
もう頃合いなので雨季は近付いている
ほんとの雨雲がやってくる予感がする



三浦逸雄 「家郷」 8号（アクリル・紙）2019

ここまで書き終ってみると、昭和天皇の戦争責任の問題は、幻想であったかのように空に消えて、皇位を継承した平成の新天皇の時代が二十九年続いた。新しい天皇は象徴だから、昭和天皇の負債である戦争責任は相続していない。その現れが服装である。昭和天皇は戦時中、大元帥として時と場合によって、陸軍の軍服と海軍の軍服を着用して名馬「白雪」に乗った。平成の天皇は戦争をしないことが建前になっているので、軍服着用の必要は全くない。しかし国は戦力を持たないと憲法に定められているにも拘わらず、世界有数の戦力を持っているのである。既に憲法は形骸化していると言うしかあるまい。政府は自衛隊は専守防衛のための最低限の軍備を持つ集団であると言うが、そんな言い分を信用する者はいないのではないか。戦後初めて組織された警察予備隊はアメリカの年鑑では Army とあったと進駐軍でアルバイトをしていた友人が言ったことがある。アメリカの日本統治は日本語には真実が伝わらないように進行していたのではないか。気がついてみると、自衛隊はアメリカを手本としたのか、陸、海、空の三軍になっている。強い日本が復活したと密かに喜ぶ向きもあるだろうが、内実は米国の肩代りにしか見えない。ここまで来ると現憲法は日米同盟にとって邪魔になるだけである。憲法改正が前面に出てくるのは理の当然である。そこで数の力が働く。国会の勢力分布を見れば良い。安倍一強とは何か。派閥が競い合う時代はとうに終わった。安倍は森友、加計問題にからんで追求を受けたが、それで退陣することはなかった。これが一強の意味するところである。世論調査は芳しくなくても、党はがっちりスクラムを組んで政策を進めるのである。安倍は昔と違って船舶ではなく飛行機が使えるので、悪く言えばトランプ詣でをして、繋がりやの強さを演出して見せた。政治家が役者に喩えられる所以である。トランプ自身が事ある毎にステージに登壇して手振り身振りよろしく放言するのに比べれば、観衆を沸かせたり笑わせたりするところは安倍にはない。真面目な訪問であって、やがてアメリカから最新鋭の戦闘機やイージスショアーといった武器を買わされるという結果が現れるのである。戦勝国である米国は瀬踏みをしながら、上陸をすべき対岸を探すのである。かつて無条件降伏をした日本は、その事実によって動かし易いのである。講和条約によって独立したからと言って、それは表面であって、内実は戦勝国有利な条約である。だから荒木亨氏が嘆いたように、この極東の島国は全般にわたってアメリカナイズされて、渋谷で起ったハローウイン騒ぎになるのである。それが一斉に映像で伝えられるのでその効果は大きい。アメリカの大統領はそのことを知っているので、流行の電子機器を使って、気に食わない報道機関のニュースはフェイクニュースだと非難攻撃する。それが同時に世界中に伝わるのである。それを面白い現象と見る向きもあるかも知れない。しかし大統領の任期は長くて八年である。パフォーマンスを失敗すればファイヤーである。政治的駆け引きよりも、不動産屋的ディールが身に付いた型破りの政界人である。しかしアメリカは大統領が自国をファーストと今更言わなくても、昔から世界一の国であって、資産も資源も沢山持っていたのである。世界恐慌の前にアメリカに留学した日本人は、夏休みにカリフォルニアの葡萄畑で働いて、授業料と生活費を稼いだという。それがいつの間にか変わった。歴史は経済と戦争によってその姿を変えるのである。アメリカは合衆国だから移民で作られた国家である。その国が今や移民反対でメキシコの国境に鉄の柵を立てて移民になりたい難民を阻止しようと懸命である。アメリカは寛容の精神を失ったかに見える。自国に失業者を抱えているからである。仕事がなく町が錆びているという。これが難民の流入反対に火をそそぐのである。トランプは何処かに活路を見いださねばならぬ。狙われたのが中国である。中国がアメリカに輸出する自動車に高率の関税をかけると言うのである。当然中国は対抗措置を講ずると発表。日本といえども枕を高くして寝てはいられないのだが、同盟国なので、今のところ手心を加えているが、課税の断念をしたわけではない。税は逃れることの出来ないものである。税は関税だけではない。民衆にとって避けられないのは消費税である。

私の知る限り消費税の始まりは竹下登内閣の五%の税であった。それがやがて八%になり、来年は十%だという。ところが軽減税率という面倒な税率をくっつけているのである。人心を混乱させるつもりなのかと言いたくなる人は多いのではないか。人心を混乱と不安に陥れるものは税金だけではない。いよいよ人類も終りかという不安である。不安は税金だけではない。世界は科学技術によって急速に変わりつつあるのである。核の問題、排気ガスによる地球温暖化の問題、国内では労働者不足による外国人雇用の問題。アメリカは失業者の問題に頭を抱えているのに、日本では失業者はいないらしい。それが外国人の雇用という発想になる。信じがたいことである。たったこの間まで、失業者はいたはずだ。みんな正規の会社員や役人になったのか。不正規と言われる労働者に待遇の改善されるという情報はない。

こういう状況にありながら、政権は消費税を国民に押しつけようとしているのである。社会保障に使うだの、教育無償化に使うだのと言う。金をばらまくのは政策のためであるが、その金は税金として徴収したのから支出する仕組みであることは皆知っていることだ。それはそれでよい。これまでに積み上げられた国の赤字は一千兆円以上になっているのだが、民間企業ならとうに倒産である。尤も、一千兆円なんて大した額ではないと言う向きもあるかも知れない。アメリカには個人で一兆ドル以上の資産を持つ超富豪がいるというから、日本が実際に倒産したら後をそういう超富豪が引受けてくれるかも知れない。経済は憂うつな科学と言われていたものだが、その通りでデフレ脱却が一年中政府によって叫ばれているが、要は金をどんどん使うことによって世の中を賑やかにせよ、ということである。「欲しがりません、勝つまでは」という標語が昭和二十年の敗戦に至るまで叫ばれていたのとは対照的である。沢山ご馳走を食べ、衣服を沢山買って身を飾り、飛行機に乗って海外にまで観光に行く。デフレ脱却の道筋である。しかしこれは消耗であって、後に残るものはない。といて、すべての経費を節約せよ、とは言えない。矢張り気前よく金を使ってもらわねばデフレ脱却はありえないというジレンマに陥っているのが現在である。時勢というものは恐ろしい。消費税を始めた竹下登より前の総理池田勇人は、国会の演説で「貧乏人は麦飯を食え」と言って物議を醸した。今日の飽食の時代なら、麦飯は健康食である。

何と言われようと時代は進む。これが歴史のメカニズムである。その中に戦争が組み込まれているのかも知れない。断定は出来ないにしても、経済の軋みの中にその要因が見え隠れするのである。過去の戦争の歴史を見れば解る。お人好しの民族は亡びる。アイヌはお人好しの民族であったので樺太では亡びた、と確かチェーホフは「サハリン島」の中で書いた。日本人がお人好しであるかどうかは私ごとき者には断定出来ないが、アメリカと同盟を結んでいる限りは、何とか独立の体面を保てそうである。つまらないことを、だらだらと書いた。老人の冷水たる所以である。(了)

まず次の一覧表をご覧ください。

重美・重文作者別一覧（年代順）

春日	4	徳若	25 (3)
日光	7	氷見	21 (4)
弥勒	3	増阿弥	4
赤鶴	40 (1)	宝来	8
越智	6	春若	1
石王	2	千代若	1
福来	17 (5)	長靈	1
龍右衛門	32 (2)	三光坊	2
夜叉	11 (6)	孫次郎	1
文蔵	5	ダンマツマ	1
小牛	8	その他	1
千種	4	作者不明	33
		計	238

この一覧表は重要美術品と重要文化財に指定された能面を作者別に列記したものである。数字はその作者の作品の数、カッコ内の数字は作品の多い順に一位から五位まで付してみた。ちなみに能面で国宝に指定されたものはない。昭和九年から昭和二四年までに二三八面が重要美術品に認定され、そのうち三八面が昭和三六年から昭和三九年にかけて重要文化財に格上げされている。

春日・日光・弥勒はいずれも「翁」の作者で年代は不明である。翁面の制作は古代まで遡る説もあって、聖徳太子作という翁面もあると言われているが、その存在は定かではない。この一覧は年代順に記しているが、あくまでも推定に過ぎず、能面の作者についてはほとんど何も分かっていないと言っても過言ではない。

春日の翁は面長の顔、日光は逆三角形、弥勒は丸顔という特徴をもっている。重文に認定されている春日の翁は、三井記念美術館が所蔵していて、時々公開される。現代の能面師が作る翁面は、そのほとんどが日光型で逆三角形である。白いひげと白いぼうぼう眉、そして深い皺を刻んだ福顔、誰でもこの面に対してはおおらかな気分になる。この面は多くの人が老人と見ているが、じつはそうではない。神なのだ。昔の日本人が神の相貌として作り出したのが翁であり、その意味でよく観ると興味深い。お寺の守り本尊が仏像であるのに対し、神社は翁面をもって本尊としている。

四番目に登場する赤鶴（しゃくづる）は鎌倉時代中頃の人と言われ、近江猿楽の役者という説もあるが確かなことは分かっていない。赤鶴一刀斎吉成と称され、その作品は四〇面という最も多い重美重文の認定を受けている。その作風は圧倒的な力強さにあり、雄渾な鎌倉彫刻の影響が大きいと思われる。世阿弥はその著書『申楽談義』において「鬼の面の上手なり」と記している。赤鶴の面には一切刻印がない。よって赤鶴の作だという証拠はなく、すべては権威ある筋の鑑定に委ねられている。一説には赤鶴打ちといわれる面が数百面もあるという。そのほとんどすべてが偽物ということになる。面裏に名前の刻印がないのは赤鶴ばかりではなく、重美重文の面の作者たちのほとんどすべてに言える。

面の裏に名前を刻印するようになったのは秀吉の号令による。よって桃山時代以後の面には作者の焼き印が押されている。同時に秀吉は刀剣にも作者名を刻するように天下に下知した。さらに「作」という字

を使うことを許されたのは刀と面だけであった。「以南蛮鉄作之（南蛮鉄をもってこれを作る）」といった文言を刀の茎（なかご）に刻んだりしている。面にも「誰それ作」といった言い方がなされ、「作」という字に重い意味があった。

赤鶴に次いで三二面が重美重文に認定されているのは龍右衛門（たつえもん）で、正式には石川龍右衛門重政という。世阿弥が賞賛しているように、若い男と女の面を作らせて龍右衛門の右に出る者は居ない。「小面（こおもて）」は女面を代表するものの一つで、「雪の小面」「花の小面」「月の小面」を秀吉が愛蔵した話は有名である。このうち「月の小面」は焼失してしまっているが、「雪の小面」は金剛家が所蔵していて、夏に毎年行われる「虫干しの会」で誰でも拝見することが出来る。「花の小面」は三井記念美術館が所蔵していて、時々展示される。龍右衛門の小面はあまりの傑作で、多くの能面師が写しを作ってきたが、誰も及ばない。小面の小は小さいという意味ではなく「可愛い」という意味だ。齢の頃なら一六歳くらいか。女として完成する前の、幼児性が残る顔となっている。このように完成の少し前がもっとも美しいという考え方が当時の見方だった。

赤鶴、龍右衛門について注目されるのは、なんとといっても「氷見（ひみ）」であろう。能登半島の付け根付近に「氷見」という所がある。この名前はその地名から出ているらしい。一説では氷見の朝日観音堂僧堂に住む堂守りと言われている。その作り出された能面が、まことにオドロオドロした恐ろしい面で、この類の面では全く他を寄せ付けない。地獄に落ちた亡者である「痩せ男」は、血の気を失った肌、くぼんだ眼、死後硬直して半開きになった口元、あまりにも真に迫る描写である。夜な夜な運び込まれる漁師の水死した死骸を、灯火を寄せて見ながら作ったという謂れが残っている。じっさい死人の顔を見ていなければ、あれだけの描写は出来ないだろう。

遠く日本海の荒波の音を聞きながら、夜な夜な灯火を掲げて棺のふたを開けてじっと見入る僧形の者、何処やら出来過ぎていて疑わしくなってくる。しかしそうした逸話が作られても不思議ではない、人の心に食い込んでくるような迫力をもった作品群ではある。毛書きとか彩色にも優れ、品格の高さと美とを備え、一級の芸術品足り得ている。

こんな面を作る心境とはどんなものだろう、さぞかし暗いものだろうと思われがちだし自分でもそう思っていた。ところが、いざこれを作り出したら、まったく逆だった。こんな楽しい仕事はないとさえ思えた。死人の顔を彫ってしだいに出来上がってゆくということに、得も言われぬ心の安定を感じたのは事実である。

われわれ能面師にとってはもとより、一般の人たちにとっても重美重文の能面は貴重この上ないものである。国民の遺産であり、民族の誇りである。これらの面を自由に観ることが出来ないものかと願うけれど、なかなかそうはいかない。次の一覧表をご覧ください。

重美重文の能面所蔵別一覧

観世	85 (36%)
宝生	70 (30%)
金剛・三井	53 (22.5%)
梅若	18 (7.6%)
その他	12
計	238

この一覧表を見て気付くことは、観世・宝生が全体の三分の二を占めて、他を圧倒しているということ。つまり日本の一級品の能面の大半を、われわれは観ることが出来ないということである。普通の人を観ることが出来るのは、今のところ次のようなところかと思われる。

すでに書いたように、三井の所蔵面は三井記念美術館が開設されて以来、年ごとに公開されている。龍

右衛門作「花の小面」、孫次郎作「孫次郎（まごじろう）」、赤鶴作「しかみ」等がいかに優れた作品であるかを改めて認識させたその意義は大きい。

京都の金剛家では、例年七月に虫干しの会を二日にわたって一般公開し、所蔵されている能面のすべてを観ることが出来る。龍右衛門作「雪の小面」を間近に観ることが出来るのは、なんといっても素晴らしいことで、われわれ必見のことと心得ておきたい。たいへん気軽に裏を見せてくれたり、時には持たせてくれたりすることさえあって、好感がもてる。

梅若家では、一九八九年の正月に朝日新聞社主催で展覧会を開催し、大きな感動を呼んだ。あれから三〇年ほど過ぎてしまったので、再度企画されることを願ってやまない。これら梅若家、三井記念美術館、金剛家の面については、立派な写真集が作られていて、手元でいつでも鑑賞できるということも有難い。これらはすべて原寸大のカラーで、横から撮られたものもあり、裏の写真も含んでいる。われわれ能面師にとってこの上ない一級の資料である。

上野の博物館には、重美重文の能面はないものの、それに準ずるほどのものを所蔵していて、順次入れ替えて展示している。じつは金春家が戦時に困窮した折、いい面を手放してしまい、その大半がこの博物館に収まったという経緯がある。

観世・宝生の所蔵する重美重文の能面には、一般人が接近することが今のところ不可能である。せめて写真で見ることは出来ないのか。

能楽の社会的地位を大きく押し上げることに功績のあった野上豊一郎が、昭和一二年に写真集「能面」を発行している。手に持った古面三千といわれる野上が、九〇面を選んで原寸大の白黒で編集している。いうまでもなく重美クラスばかりで貴重この上ないが、神田の古書店に出たときは、数十万円であつという間に売れたと聞いている。昭和五四年に京都の駿々堂が、野上氏に追隨する企画を立て、書名も同じ「能面」として二六万円で出版した。この書は中村保雄の編集によって、原寸のカラー・モノクロ一八〇枚の写真収めている。この中に三八面の重文のすべて、百十一面の重美の面を掲載する豪華さを考えれば、この価格は妥当と言えるかもしれない。現在では古書として五万円位で入手することが出来る。

重美重文にこだわらなければ、能面の写真集は数多く出版されている。彦根の彦根城博物館では、井伊家伝来の能面を多数常設展示している。何時行っても観ることが出来るというのは有難いことで、写真集も出版されている。ただし重美重文は一面もなく、重美に準ずるほどの面も数点にとどまる。

それでは重美重文の能面とそれ以外のそれとは違いがあるか、あるとすればどう違うのか、少し考えてみたい。まず違いは画然たるものがあると見る。初めの頃は判らなかつたが、長年能面作りに携わってきて、観ればみるほどその違いの大きさに驚かされるようになった。その違いはなにか。突き詰めるところ、オリジナルと写しの違いというところに帰着する。赤鶴、龍右衛門、氷見といった人たちの諸作品は、その人の創作面であって、納得行くまで追及して作り上げている。そこに大きな価値がある。重美重文の能面は皆そのようなものであって、故に貴重であり、他との大きな開きがあると思う。

それ以後の能面はそれらの写しであって、江戸時代以後現代に至るまで、すべての能面師は写しに徹して作ってきている。重美重文の作者たちの中に、名人の誉れ高い河内大掾家重（かわちだいじょういえしげ）の名が入っていないのを不審に思われる向きもあるかもしれない。河内と並び称せられる是閑吉満（ぜかんよしみつ）についてもそのことは言える。河内・是閑ともに秀吉から「天下一」の称号を与えられた自他とも認める名工である。しかし河内には「若女」という創作面以外に創作面はなく、名作の写しを多く作ってきた。それも寸分の狂いなく写すのではなく、より分かりやすく、バランスよく作っている。孫次郎作の「孫次郎」は、目の左右の高さが違い、そのまま写すと不気味さばかりが目立ち、その心が写せない。ところが河内はそれを改良して、より美しいバランスの取れた造形にまとめている。般若坊作の「般若」でも角の方向がバラバラで左右のバランスがかなり狂っているのに対し、河内はよく調整し、見事なほど美し

い造形美を作り出している。よってその後の能面師の多くは、河内の面を手本にして写してきている。

河内とか是閑とかは、オリジナルから写しており、そのままの写しではなく、自ら信ずる美意識に基づいている。まさにそれは「真を写して 容（かたち）を写さず」という彫刻の極意を示している。また河内は「河内彩色」と言われる彩色の技法にも大きな足跡を残し、その後の能面師たちに多大な影響を与えてきた。いわば河内とか是閑は模刻の雄であると同時に、新境地を開いた人であった。

その後続く能面師たちは写しに徹し、寸分たがわぬ写しにひたすら邁進してきた。先人の写したものを写す、このことによってしだいに生气を失っていったのは当然と言える。江戸時代の將軍家お抱えの能面師は、写しに徹するあまり、枝葉末節の技巧に走り、おおらかさ、力強さから遠いものに墮していった。いまでもオリジナル作品から直接写すことが出来ず、写しの写しのまた写しとならざるを得ず、厳しい評価を浴びることになりがちである。われわれ現代の能面師も、河内の進めた道を追求したいものだと思う。つまり「真を写して容を写さず」という彫刻の極意を、求めたいものだ。そのためにオリジナルである重美重文の面を、この眼で観たいと切に願うばかりである。

原点をなすオリジナルの面を観たい、この願いを叶えられないことの無念さを痛感するばかりである。観世・宝生の所蔵する重美重文の面の公開、これは夢のまた夢なのだろうか。

4月1日、新しい元号が発表された。5月を迎えると私は昭和、平成、令和と3つの時代を生きることになる。昭和から平成に変わったことでさえ、つい最近のことのように感じていたのだが、平成も今年で31年、平成生まれでも30歳を越えた人がいることを考えると、年月の過ぎるのは実に速いものだとつくづく思う。「昭和〇〇年生まれです」と言われても「じゃあ〇〇歳なんですね」と、もうとっさに年齢を割り出すことも難しくなった。外務省は元号が変わるのをきっかけに、外交文書の日付を西暦に統一すると発表していたが、一部の与党議員の反発を受け、国内文書は元号表記を続けるとすっかりトーンダウンしてしまった。煩雑さを避けるために（私がボンクラということもあるが……）、公文書や銀行の用紙などが西暦表記になることを期待していた私としては、ガッカリの結果である。

私にとって昭和や平成はどのような時代であったのか。今回は〈私の昭和、そして平成〉を振り返ってみたい。

私は昭和35（1960）年、父の仕事の赴任先の高知県で生まれた。父は公務員で蚕の研究をしていたが、私の誕生後すぐに栃木県への転勤が決まり、高知県で過ごした記憶は残念ながらひとつも残っていない。その後、私が幼稚園に上がる前に父は公務員を辞め、祖父の経営する東京都板橋区の印刷屋に勤務するようになり、私たちの住まいも栃木から埼玉県大宮市（現・さいたま市大宮区）へと移っていた。埼玉県大宮市小深作……今でもその頃の住所は忘れずに憶えている。子どもの頃の記憶というのは一生ものなのかもしれない。すでに東武野田線が開通していて、最寄り駅は「七里」。私が幼稚園に通う頃にはまだ民家もまばらで、春先には広々としたれんげ畑の向こうに隣町の岩槻市（現・さいたま市岩槻区）を見渡すことができた。朝鮮戦争の特需に沸いたこともあり、子どもの目には最早、太平洋戦争の傷跡など全く目につかない時代になっていた。かつての戦争は終戦日あたりに放映されるテレビの中か、大きなお祭りのときに見かける傷痍軍人の姿にしかなかった。大島渚監督が傷痍軍人を追ったドキュメンタリー「忘れられた皇軍」（1963年日本テレビ制作）では、傷痍軍人がかつては日本軍として戦い、手足を失ったり失明するなどの重い障害を抱えることになったにもかかわらず、戦後に韓国籍となったため、日本国からも韓国からも見放され、物乞いをするしかなかった姿を追っている。繁華街の路上で白装束を纏い四つん這いになって物乞いをする、その行動は彼らの存在を認めようとしないうちたちに対する無言の抗議でもあったのだと思う。私は近年このドキュメンタリーの存在を知り、ネットで観たが大島監督の反骨精神とドキュメンタリー監督としての力量に感銘を受けた。

昭和39年、私が4歳のときに東京オリンピックが開催されテレビで放送されたはずだが、こちらもなぜか全く記憶に残っておらず、私の頭の中で展開されるオリンピックの映像は市川崑監督の記録映画のそれなのである。私がまだ子どもだったためか、60年安保闘争も私の中では素通りしている。ひたすら高度成長期をひた走っていた時代で、わが家にあった白黒テレビも、アメリカのアポロ11号の月打ち上げが衛星中継されるのを機に、カラーに変わり、またどの家でも冷蔵庫や洗濯機はあたり前に活躍していた。畑しかなかった近隣には新しい家が次々と建ち並んでいった。私の家庭でも金銭的な余裕ができて、習字にピアノと習いごとを始めたり（どれも才能がなく道半ばで途絶えてしまったが）、塾に通ったりしたものだ。この頃は同時に凄まじい公害の時代でもあり、日本四大公害（水俣病、新潟水俣病、イタイイタイ病、四日市ぜんそく）が問題視されたのもちょうどこの時期だ。しかし産業最優先で長い間、これらの問題は放置、もしくは暴力で押さえ込まれていた。水俣病は今この現在であっても完全解決には至っていない。この負の精神性はその後起きる福島原発事故へと続いている。光化学スモッグ注意報が発令されるようになったのも、この頃からだったのではなかろうか。

昭和 40 年代に入るとテレビという存在は、家の中で絶対的な地位を誇るようになっていた。幼稚園の頃はもっぱらアメリカのアニメ（この頃は「アニメ」ではなく、「マンガ」と言っていた）が放送されていたように記憶しているが、小学校に上がる頃には国産のアニメが続々と制作され、放送されるようになった。ジェンダーなんて意識はなかったから、少年向けアニメ、少女向けアニメとかなりカッチリと線引きがされていた。少年向けアニメでは「あしたのジョー」や「巨人の星」、少女向けアニメでは「アタックナンバーワン」のいわゆるスポ根ものが人気だった。手塚治虫もたくさんの少女向けアニメを手掛けているが、私は少女向けよりも「ジャングル大帝レオ」が好きで、裏番組が観たいひとつ違いの兄とチャンネル権を争ってよく喧嘩をしたものだ。フィンランドの作家トーベ・ヤンソン原作の「ムーミン」も私たちの世代では人気を博していたが、父が日曜日の同じ時間帯に放送されていたドキュメンタリー番組を観ていたのだから、私は観ることがなかった。月曜日の朝、友人たちの間ではムーミンの話で持ちきりだったが、私とその輪に加わることはなかった。その憧れがこの歳までどこかで引きずっていて、たまに水道橋にある後樂園の中にある「ムーミンカフェ」に行って、その頃の心の渇きを癒やしている。

歌番組やお笑いも盛んに放送されるようになり、歌手では男性が野口五郎、西城秀樹、郷ひろみが御三家、女性は南沙織、小柳ルミ子、天地真理が御三家（今振り返ると不思議な組み合わせだが）で、私が中学生になる頃には山口百恵、桜田淳子、森昌子の三人娘が続いた。私は郷ひろみ、兄は天地真理に熱を上げ、大晦日はレコード大賞から紅白歌合戦を観るとというのが定番だった。お笑いは関東地方では、何といてもコント 55 号やザ・ドリフターズが絶大な人気を博していた。卑猥なネタには PTA のお母さんたちがテレビ局によく噛みついてきたものだ。だが、子どもたちはちょっとエッチなことには目がなくて、親たちの怒りをよそに、そのネタを直ぐに憶えて友だちに披露するひょうきん者がいて、クラスの人気者となるのであった。

どれも思い出すにひたすら懐かしい。子どもたちはテレビに釘付け、テレビは偉大なる子守り役だったのだ。（続く）

第十九章

雪が降って一メートル近く積もりましたが、乾いた砂の様でした。如何なる火もありませんでしたが、私たちは穴の中で暖を取り、非常に小さな空間に六人居りました。一人は横になって食べていました。一種のトンネルの中に体を突っ込み、そして一台のテーブルに何人も肘をついていたのは本当です。外に出る時は、私たちには皮で出来た柔らかい靴と木底靴がありました。柔らかい靴は幸いなことに馬小屋の仕事をするために定期的に用意されます。それらの靴は固くなった雪の上ではベルの様に鳴りましたし、私たちの塹壕を造っていた氷の斜面では滑りました。この大雪は、軍事命令としては幾つかの注目すべき機会でもありました。我々の砲台は埋められていました。開けて外へ出すには幾らかの用心によって人間が姿を現すことにはなりますが、完全に眼に見えないと見做すことも可能でした。しかし、一発目の発砲は数多くの黒い足跡を残しましたので、私たちを容易に発見させることになりました。つまり雪を運ばなければなりませんでしたが、私たちは飛行機から撮った数枚の写真で発見されました。どんなに小さく踏みつけた処でも、仕事をした場所を大変明瞭に示していたのです。しかしながら私たちは偶発的な砲弾しか受けませんでした。それに反して、私たちはアエツト峡谷周辺に我々の砲撃の後を残すことが出来ましたが、そこは我々の障害物の目標でしたし、まさしく標的の様なものでした。そして、それらの砲撃は規則正しく分配されていました。ヴェルダンの大障害物からは一度ならず耳にがらがん響きました。私たちは一分間に二発の砲撃で勝負を付けましたが、我々の大砲にとってはそれが最速でしたし、蛙が跳んで退却する様でした。その上に、全ての大砲にはリズムがありました。早かったりそうでなかったりしました。ピストンのブレーキは慎重に抑制された発明の一つで、有効性が無いことを私は既に言いましたが、煙の出ない火薬も同じです。この抑制は非常に大きな大砲にしか役立てることが出来ません。少し発砲するだけで移動するのは難儀です。私は腕時計で発砲の速度を確かめました。それも私の任務の一部でした。もう一つの任務は夜の発砲を命じることでした。これは驚くべき発砲で、複数の大砲が同一地点を砲撃で粉々にすることでした。先ず第一に電話で腕時計を合わせなければならず、その次に定刻を待ちながら徹夜になるかも知れませんでした。定刻に近づくとつれて仕事が難しくなりました。ランタンを持って幾つもの班を起床しに、二つの砲兵中隊を走り回らなければなりませんでしたが。氷河のこの地形は穴や瘤を作っていて、ランタンの明かりの輪では限界があり、実際に間違えることもありました。時折私は地面すれすれの処で大砲の口を見ましたが、多くのことが分かりました。戻らなければなりませんでしたが。私は最後に温かいトーチカを幾つも発見して、眠っている人々を揺すりました。全員が二つの砲兵中隊に沿って移動している間、私は占領していた地点に身を置いて、二度目の砲撃の時を待ちました。その時、大砲から八発の砲撃が行われて、私は喜びました。それは八本の細長い火の跡を残していて、大変な喧騒でした。他の砲兵中隊も、速くても近くても同時に発砲しました。私は陶醉しました。もしもそれと同時に目標に着弾したのを見たならば、この大砲の追撃は最も大きな喜びの一つになるでしょう。「殺人を考える観点は無いでしょう」。しかし誰がそれを思考するのでしょうか。私は、何発もの時限弾があちらこちらで必ず爆発しても、そのことを考えることさえありませんでした。その間に避難所まで滑り易くなった足で戻りました。人間が一つの力を行使している時には怖い筈がありません。動きの一つが他の動きを排除するのです。

それは私にもう一つの間人狩りを思い出させます。そこでの私は人殺しの意志がありましたし、更なる上で明らかになりました。それはボーモンの立派な監視者に従事することでしたし、そこでは大変に大きな景観が見えました。ところで、ガルガンチュアという名の森の近くには有名な砲兵中隊がおり

ましたが、草原に沿ったり小さな茂みの近くを毎日呑気に通る食事の運搬人を私は見ました。私たちには小さな茂みに向けられた一門の大砲がありました。問題なのは、砲弾の飛行が考慮された丁度良い時に正確な発砲を命令することであり、その飛行は少なくとも十秒間かかるものでした。この砲弾は一度も人間に触れたことはありませんでした。しかし、その働きは情熱を掻き立てました。砲弾の通る音が聞こえました。そして次には全員が沈黙して、静かにその茂みに近づきました。それから数秒後に立ち止まって恐らく耳を傾けて見ました。そして砲弾が近隣で爆発していた間に、近くの溝に向かって走るのが見えました。唯一の成果は、彼らがもっと先まで溝を掘っていたことでした。その茂みを発砲した大砲は九十ミリ砲で、思い出しても優れていた旧式の型でした。これらの大砲は大変正確に発砲したのです。このデサルー砲弾の直径は、後方がやや細く作られていました。この形の変化は射程距離を千メートル以上長くしました。その時に哨戒中の大砲としては、輸送車の列が通過するのが見えると道路を妨げることが出来ました。一発の砲弾で十分でしたし、私たちはそのことを良く知っていました。それらの働きには如何なる悪意も無いことを私は知って欲しいと思います。狩猟の様な熱心さで全て行われていたのです。

ヴィニエヴィルでは私は獲物を見ませんでした。しかし専門の活動は既に十分専念していて、私は長期の休暇を残した儘にしていましたし、この戦争の任務に少しも退屈していませんでした。今では大尉が私と話していても、彼は大尉であったことを忘れていました。彼は時々言いました、「あなたが班の人と笑っているのを聞くが、私はあなたを羨ましいと思う。私は独りである。余り私を忘れないでくれ」。彼は私の肖像を油絵で描きました。しかし私は、彼がこの種の絵を描き上げる術を知っているとは思えませんでした。というのも、その創作は中断されたからです。砲台や雪景色の素描を、水彩画やグワッシュ画（1）に着色された彼のものを私は単に見ることが出来ただけでしたが、確かに良い出来でした。大地の瘤はここでは怪しいものでした。そこでは待ち伏せている力の予感がしました。しかし私たち以外の人々が、これらの些細なしるしを把握していたのでしょうか。私たちはこのことやその他の多くのことについて議論しました。私はダ・ヴィンチやミケランジェロやラファエロ以後の絵葉書を郵送して貰っていました。私には大変に確かな好みがあり、私のことは確信を持って正しく言いたいのです。しかし一般に私は、そのことを少しも行使しません。芸術に興味を抱くには、退屈な思いに陥り易くならなければならないと私は思います。これらの会話は私の裡に不変の意見を目覚めさせました。そして、その点についての注意力を身につけながら、私は心密かに『芸術論集』を書き始めました。（完）

（1）グワッシュ画は、アラビヤゴムで顔料を溶いた不透明水彩画である。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲筑三（いずもつくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めつき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車 1000m タイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人 2000m 速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

北岡善寿（きたおかぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こうゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノ P S T A 指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

さとうのりお

1950 年、新潟県生まれ。

1974 年、セツモードセミナー卒。

日本詩人クラブ会員

「山脈」同人

神宮清志（じんぐうきよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面

も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近は視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「露」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高島りみこ（たかしまりみこ）

一九六〇年高知県生まれ、東京都中野区在住。

日本詩人クラブ、日本現代詩人会会員

詩誌「山脈」「花」同人

詩集『海を飼う』（二〇一八年 待望社 第32回福田正夫賞）

装幀家（高島鯉水子）

究極の趣味はキックボクシング（アマチュア）！最近は試合に出していないが…

高村昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年からパブの電子書籍に、随想集『アランと共に』（全3巻）及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』（全5巻）『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録中。日本詩人クラブ会員・日本仏学史学会理事

富永たか子（とみながたかこ）

一九三四年 福岡県柳川市生

日本ペンクラブ・日本現代詩人会・横浜詩人会各会員

「回游」「めびうすの輪」「相模原詩人クラブ」に所属

既刊詩集1『シルクハットをかぶった河童』（第二四回横浜詩人会賞受賞）

2 『月が歩く』

詩人北原白秋と同郷。幼児教育に携わり、詩に親しんできた。相模原詩人クラブ主宰。三十五年間詩誌「ひばり野」を年一回発刊し現在に到る。「風狂の会」にて多くを学び席をおく。

長尾雅樹（ながおまさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくらますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

樺自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦逸雄（みうらいつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークル Circro de bellas artes で人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。

一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

同人誌風狂（ふうきょう）第57号

2019年4月21日登録

<http://p.booklog.jp/book/125922>

編集：風狂の会（担当：高村 昌憲）

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/125922>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト